

日本の国際化を考える

——江戸から東京へ（外国人の視点から）——

鈴木 英 明

1 はじめに

江戸が東京と名を改める 19 世紀は、日本が西洋文化と本格的な接触を始めた時代であった。16 世紀に初めて西洋文化に触れた時と異なり、今回は社会全般にわたる変革を引き起こす衝撃的な出会いであった。アメリカのペリー提督が 4 隻の艦隊を引き連れて浦賀に現れたのが 1853 (嘉永 6) 年、徳川幕府が崩壊し、明治政府が誕生するや日本は、近代国家を目指して遮二無二に走り始める。この時の日本人は、中国文化の衣から、いち早く西洋文化の服に着替えようとするかのように、近代化の御旗のもと西洋の文物、制度を採り入れ続けた。これほどの短期間で日本社会の変貌ぶりは、外国人からみると驚きの一言に尽きた。それと同時に、日本社会の行く末に危惧の念を抱く人々がいたのも事実であった。

76 (明治 9) 年に東京医学校 (翌年、東京大学医学部と改称) に着任したドイツ人ベルツは、彼の日記に次のように綴っている。

現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや何もかもすっかり野蛮なものでした〔言葉そのまま!〕」とわたしに言明したものがあるかと思うと、……「われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と断言しました。……これら新日本の人々にとっては常に、自己の古い文化の真に合理的

なものよりも、どんなに不合理でも新しい制度をはめてもらう方が、はるかに大きい関心事なのです。（『ベルツの日記』）

このように性急な変革に邁進する日本人の姿が、彼の日記のそこここにとらえられているが、急ぐあまりに、安易に西洋文明の果実のみを取り込もうとする日本を危ぶむ思いも彼は表明している。日本在留 25 周年を記念した祝賀の席での演説で、

西洋の科学の起源と本質に関して日本では、しばしば間違った見解が行われているように思われるのであります。人々はこの科学を、年にこれこれだけの仕事をする機械であり、どこか他の場所へたやすく運んで、そこで仕事をさすことのできる機械であると考えています。これは誤りです。西洋の科学の世界は決して機械ではなく、一つの有機体でありまして……（『同』）

と話している。

同様な心配をするのはベルツだけではない。70（明治 4）年末に来日、福井藩校の明新館で理化学を教えた米人のウィリアム・グリフィスは、『明治日本体験記』に以下のように記している。

今、試みられている力強い改革が完成し、永遠なものになるだろうか。一国が根がなくてキリスト教文明の果実のみを占有できるだろうか。できないと信じる。

日本のような、キリスト教国でない野蛮な国が近代文明国になれるのだろうか、というのが当時、日本を訪れた多くの外国人が持った疑問と言える。駐日英国公使であったラザフォード・オールコックは『大君の都』に書いている。

実際ヨーロッパに存在するすべての文明は、キリスト教によって形成され、その最善の型の発達のすべてはキリスト教からきている。であるから、近代文明の成長をキリスト教の影響と切りはなして跡づけることが不可能だということはもちろんである。

日本が近代国家に向けてまっしぐらに駆けている姿を目の当たりにして次のような感慨を抱いた人もいた。駐日米国総領事であったタウンゼント・ハリスは、57（安政4）年、長い交渉の末にようやく実現した将軍に信任状を直接、奉呈するために江戸に行く途中、神奈川から川崎に向かう東海道の見物人の幸福そうな姿を見て、彼の日記の『日本滞在記』でこう述べている。

これが恐らく人民の本当の幸福の姿というものだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響をうけさせることが、果してこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるか、どうか、疑わしくなる。

しかし現実日本の近代化の勢いは止まらない。その結果がどうであったか。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、『神国日本』で次のような恐ろしい悪夢をみている。

この国のあの賞賛すべき陸軍も勇武すぐれた海軍も、政府の力でもとても抑制のきかないような事情に激発され、あるいは勇気付けられて、貪婪諸国の侵略的連合軍を相手に無謀絶望の戦争をはじめ、自らを最後の犠牲にしてしまう悲運を見るのではなからうか、などと、悪夢はつづくのである。

幕末から明治にかけて来日した西洋人は、日本の社会についてどのような思いを抱いたのか、何に関心を持ったのか、彼らの日記、旅行記などを通して日本の国際化についてみていくことにしたい。

2 オランダとの交流

日本が開国をする以前は、長崎の出島が西洋に通じる細いパイプであった。そこを通してオランダとの交流がなされ、西洋の文化が流入し、日本の文化が西洋に紹介されていた。出島にはオランダ東インド会社の商館が置かれ、そこに10名ほどの社員が駐在していた。彼らの主な業務は貿易と江戸参府であった。江戸参府は、社員のうちの3名、商館長（カピタン）と医師、書記が「貿易継続への感謝のため将軍に拝謁し献上品を贈る儀式として定例化した」（松井洋子『ケンペルとシーボルト』）ものである。

商館の医師として勤務するフィリップ・フリッツ・フォン・シーボルトが江戸参府に参加するのは、1826（文政9）年。この時の様子を彼は『江戸参府紀行』として書き残している。以下、それによって交流の実際を見ていこう。

彼は2月15日、出島を出発して陸路小倉に、そこから下関へ船で渡り、船を乗り換えて瀬戸内海を進み室に上陸、再び陸路で大阪に向かい京を経て、4月10日に江戸に到着している。下関に滞在中の2月28日の記事に、「晩に使節とわれわれは府中候の医官の訪問をうけた。22（文政5）年コック・ブロムホフ氏を訪ねてきたのと同じ人であった」とある。「17世紀の段階では、オランダ人が参府の道中で日本人と接触することは禁じられ、厳しく監視されていた」（『ケンペルとシーボルト』）のが、地方の大名の医官が比較的自由に交流できたのは、「八代将軍吉宗は、実用的科学・技術の導入への関心から……幕府の医師たちや、実学の担い手として抜擢した青木昆陽・野呂元丈などを参府中のオランダ人のもとに派遣し対談させ、オランダの学術を学ばせようとした」（『同』）からである。いわゆる蘭学の誕生である。こうした訪問が度重なり習慣化するにつれ、禁じられていたことが空洞化していき、「キリスト教徒であるオランダ人への治安上の警戒も、当初の危機感が薄れ、形骸化していった。」（『同』）。

この日、シーボルトは医官に新しい薬品と本を贈った。この本は薬草と

その代用品や新治療薬に関する簡明な薬品目録であって、フォン・シーボルトの弟子の高良斎が翻訳し、大阪で出版された。下関滞在中には、「もう一人の市長が使節のもとに来て挨拶したが、この人はオランダ人の熱烈な愛好者であって、彼はこういうものだとすぐに名刺を通じて名乗りでた。愛好者というのは、名刺にファン・デン・ベルフと書いてあったからである。」(『江戸参府紀行』)。この名は前の使節ゾーフが付けたそうで、「全くヨーロッパ風の家具を置いた部屋でわれわれを出迎えもてなしたのであるが、……オランダの衣装を着て出て来た」(『同』)。この衣装はゾーフの贈物で彼が将軍に謁見した時に着ていたものという。これほどにオランダ趣味の高じた人もいた(注によればこの人物は伊藤奎之允)。オランダ好きな人は大名にもいた。ファン・デン・ベルフは、前商館長のコック・プロムホフが中津候に対して書いた詩を所蔵していた。そこには、「中津の殿、フレデリック・ヘンドリック候に捧ぐ」(『同』)、とあって、中津の殿とは奥平正高のことで、彼もこのようなオランダ風の名を持っていた。彼は薩摩藩主島津重豪の次男で奥平家の養嗣子となり、豊前中津藩を継いだ。父と子の二人とも「オランダ趣味を愛好する……収集家であるとともに……蘭学をめざす人びとのバトロンともなった」(『ケンベルとシーボルト』)) 大名であった。

使節一行は六郷川を渡って江戸の近づいたところで薩摩候と中津候の出迎えを受ける。薩摩候は若君(斉彬)を同伴していて、対談中にはオランダ語をはさみながらいろいろと質問が出た。中津候もフォン・シーボルトに対し、「ドクトル・シーボルト、私の方へ来たまえ。手紙と贈物を有難う」、とオランダ語で語ったそう(『江戸参府紀行』)。一行はこの日(4月10日)、江戸の宿舎長崎屋に着いた。

蘭学を許された青木昆陽が「オランダのカピタンを宿屋に訪うては、横文字の読み方、書き方などを教わりました。」(『おらんだ正月』)とあるように、この長崎屋には使節の滞在中、蘭学者、医師だけでなく様々な人が訪問してきた。到着の翌11日に訪ねてきた人々は、桂川甫賢(オラン

ダ名、ウィルヘルムス・ボタニクス)、中津候の家臣の神谷源内(同名、ピーテル・ファン・デル・ストルプ)、医師大槻玄沢などで、大部分の人はオランダ名を持ち、オランダ語を話し、聞き分けることができたという。その夜は中津候も参加してヨーロッパ風にもてなし、「非常に楽しく、全くくつろいだ態度でこのオランダ人の愛好者と過ごした。……各人は非常にうまくめいめいの役を演じたので私はこらえていることができず、フランス語で、これは私が今まで見たことのない独創的な喜劇だと使節に耳うちした」(『江戸参府紀行』)。楽しいひと時は夜更けまで続いて、中津候は引き上げたという。翌12日、使節たちが渡す贈物の整理に追われていたときには、島津候から贈物が届き、「夜には中津候がお忍びでみえ、夜更けまでおられた」(『同』)。13日の記事には「日本の友人、医師多数来訪」とある。15日の記事によると、晩に中津候および薩摩侯の正式の訪問をうけ、立派な贈り物があつた。このときの話題は音楽、詩歌、書籍、機械類におよび、話は夜半まで続き、薩摩侯は一羽の鳥を持参していて、彼の望みにこたえて、剥製にして見せた、とある。16日には、最上徳内が訪れ蝦夷、樺太の地図を貸してくれたことを、ラテン語で記している。18日、天文方高橋作左衛門が来訪、いわゆるシーボルト事件の当事者が登場する。

将軍家斉に拝謁する儀式は、名前を呼ばれ恭しく敬意を表して、何も言わずに引き下がってあっさり終わる。フォン・シーボルトは、ケンペルのときのような将軍の前で踊ったり歌ったりせずに済んだことに幸福だというべきだった、と感想を述べている。

医師ケンペルが踊ったり歌ったりしたのは、将軍綱吉に拝謁した1691(元禄4)年3月のことで、彼の『江戸参府旅行日記』によってその時の様子を知ることができる。拝謁の儀式のあと一行は御殿の奥の部屋に案内された。御簾の後ろには将軍と夫人をはじめ将軍一族の姫たちや大奥の女性たちが集まり、老中や若年寄、その他高官、大名の子供たちなどが周りを囲んでじっとみつめているなかで、「バタビア総督とオランダの王とは

いずれが権力を持っているのか」「癌とか体内の潰瘍に其方はいかに対処しているか」など、いろいろと将軍から尋ねられた。そしてこれだけで終わらずに、ケンペルのいう猿芝居がはじまった。立ち上がって歩かされたり、互に挨拶し、踊ったり、跳ねたり、酔払いの真似をさせられたりした。彼はドイツの恋の歌をうたいもした。結局2時間にわたって見物された、と書き残している。

商館長らの江戸参府にあたっては、西洋の品々が献上品として将軍に送られ、お返しの贈物は、告別の拝謁の時に時服が渡された。時服は天子や将軍が臣下に賜う衣服のことで高級品である。これをオランダ人は次のように処分していたという。「この高価な絹製の衣装は、オランダ人の手によって海外に転売され、ヨーロッパの裕福な人々の間で、エキゾチックな遠い異国から来た衣服として、非常に珍重された。モーツァルトの歌劇『魔笛』……の台本には、第一幕で王子タミーノが『日本の服』を着て登場するよう記されている」(B. M・ボダルト=ベイリー『ケンペル』)。

フォン・シーボルトの『江戸参府紀行』に戻ると、4日に将軍と世子に別れの拝謁があり、そのときに贈物の時服を拝領している。5日に薩摩侯が、7日に中津侯が来訪、その後、友人、知人多数の訪問を受け、18日に江戸を発った。品川で82歳になった薩摩侯のもてなしを受ける。「老侯は少しばかりオランダ語を話し、かなり前に来日した商館長ティチングをよく知っていたという話をされた」と書いている。ティチングは1779(安永8)年、初めて来日し、80年までと、81(天明元)年から83年までの2期、商館長を務めている。(『ケンペルとシーボルト』)

フォン・シーボルトの下関、江戸滞在は、大名をはじめ医師、学者、商人ら大勢のオランダ愛好者たちとの交流で彩られ、人々が外国語であるオランダ語を操り、交際を繰り広げるさまは、限られた場とはいえ、国際化が華やかに展開したひと時であった。

またフォン・シーボルトは、長崎奉行らの好意的な計らいにより、出島の外部である長崎郊外の鳴滝に塾を構えることができた。そこで、高野長

英や岡研介ら各地から集まった日本人に医学や博物学、オランダ語を教えるかたわら、病人の診療も行った。

3 ペリーの日本遠征

フォン・シーボルトが日本地図などの禁制品を国外へ持ち出そうとしたことが発覚し、国外退去、再渡航禁止の処分を受けて（28年シーボルト事件）、日本を去ってから24年が経過した1853（嘉永6）年7月、アメリカのマシュー・ペリー東インド艦隊司令長官兼特命全権大使が日本にあらわれた。『ペリー艦隊日本遠征記』によると、ペリー提督の日本遠征を聞いたフォン・シーボルトは、遠征隊に加わりたい希望を提督に伝えたが断られている。提督はシーボルト事件のことを知っていた。日本から追放された人物を同行することで生じる悪影響を避けようと、有力者の圧力を退けて彼の同行を拒否し続けた、という。日米和親条約の締結後のことであるが、「シーボルトはボンで『世界各国との航海と通商のために日本を開国させるにあたり、オランダとロシアが成し遂げた努力についての真実の記録』と題する小冊子を出版した」とあって、「明らかにこの冊子は、抑えつけられた、鬱積した虚栄心の産物であり、二つのあからさまな目的がはっきりと見てとれる。ひとつは著者自身に栄誉を与えること、そしてもうひとつは、合衆国とその日本遠征を非難することである」、と『同遠征記』に記されている。さらに、フォン・シーボルトのロシアとの親密な関係から、日本人が彼をロシアのスパイと疑ったこともまんざら間違いとは思えないといい、彼が遠征隊に同行しようとしたのはこの企てを失敗させようとしたからではないか、とまで指摘している。提督が彼の忠告に従ったことで条約締結に成功した、と平然と主張するような途方もない自負心の持ち主である、とフォン・シーボルトを非難し、彼の冊子に徹底的に反論している。『同遠征記』は、ペリーのフォン・シーボルトに対する不快感をはっきりと示している。

ペリー提督の率いる4隻の艦隊（旗艦サスケハナ号）が、浦賀沖に現れたとき、艦隊は日本の番船に取り囲まれた。そのうちの1隻が舷側で読めるように高く掲げた文書には、フランス語で、「艦隊は撤退すべし。危険を冒してここに停泊すべきではない」という趣旨の命令が書かれていた（『同遠征記』）。そして「横づけにした番船上の一人がまことにみごとな英語で『私はオランダ語を話すことができる』と言った」（『同』）。これが記録に残る、初めて日本人がアメリカ人に話した英語といえる。こうして米国側の英語・オランダ語の通訳と日本側の日本語・オランダ語の通訳を介して日米間の意思疎通が始まった。

幕府との交渉にあたって、提督のとった方針は「断固たる態度」をとることだった。これは、後に続く米英の外交官、タウンゼント・ハリスやラザフォード・オールコック、ハリー・パークスらがとった態度に通じるものがあり、ペリーは、来日前にすでにこうした方針を、「厳格に実行する決意をかためていた」（『同』）。そうすることの理由は、先例に反し、「文明国に対し当然とるべき礼儀にかなった行動を、権利として要求し、好意に訴えない、……狭量で不快な対応をいっさい許さない」ことが、提督に「課せられた使命を確実に成功させる最善の方策と信じていたからである」（『同』）。ただ断固たる態度には、最悪の場合、武力の行使までを含めていたことは留意していてよいだろう。日本研究家のバジル・チェンバレンは、日本を開国に導いた日米和親条約の締結（54年3月）にいたるペリー提督の交渉について、「ペリーが勝利を収めたのは、弱くて無智で、全く不用意で、武備も不十分な日本人を脅かし、彼らの肝をつぶしたからである」と『日本事物誌』に記している。

日本人の「知識や一般的な情報も、……優れていた」と『同遠征記』に記されているが、以下にそうした個所を拾い上げてみる。「オランダ語、中国語、日本語に堪能で、科学の一般原理や世界地理の諸事実にも無知ではなかった。地球儀を前において、合衆国の地図に注意を促すと、すぐさまワシントンとニューヨークに指をおいた。……イギリス、フランス、デ

ンマークその他のヨーロッパの諸王国を指さした」「また、地峡を横断する運河はもう完成したのかともたずねたが、これはおそらく建設中のパナマ鉄道を示唆していたのであろう」「長崎のオランダ人を通じてヨーロッパから文学、科学、芸術、政治についての定期刊行物を毎年受け取っており、その一部は翻訳されて刊行され、帝国中に頒布されるのだという」。この定期刊行物はオランダ風説書のこととおもわれる。「ヨーロッパの戦争、アメリカの革命、ワシントン、ボナパルトについても彼らは明晰な会話ができた」「露土〔ロシア・トルコ〕戦争についてのわれわれの見解をたずねたりした」。露土戦争の開戦は53年であるので、この質問が発せられたのは開戦直後のことになる。

日本人の科学の知識、技術力については、「日本人は土木工学の知識がある程度そなえ、数学、機械工学および三角法についてもいくらか知っている。そのため非常にみごとな日本地図も作成されている。彼らは高度計でいくつか山の高さを測り、立派な運河も建設し、水車や水力旋盤も作っている。また日本製の時計を見ると、彼らがいかに器用で巧みであるかが分かる」。医学については、「オランダ商館長が江戸へ行くと、同伴したヨーロッパ人の医師が必ず日本人医師の訪問を受け、専門的な事柄について質問されたということである」「彼らの最もよく理解しているオランダ語によって得られる知識は、すべて翻訳されている」。ただ、死体解剖がほとんど行われないため、「解剖研究が行われなければ、内科医や外科医の知識が不十分なのは明らかである」、と指摘している。天文学については、かなり進歩しているとして、「ヨーロッパ製の器具の扱い方を心得、その多くを日本の職人は非常にみごとに模造している。……日本人は月蝕を正確に算出し、年ごとの暦は江戸と内裏の大学で作成される」。日本製の器具は望遠鏡、クロノメーター、寒暖計、晴雨計などである。

日本人が示す好奇心についても書き留めている。ペリーの再訪時、アメリカ側から電信装置が贈られた。それを使って1マイルほど離れた2つの建物間で通信の実験が始まると、「日本人は強烈な好奇心をもって操作

法に注目し、一瞬のうちに伝言が英語、オランダ語、日本語で建物から建物へ伝わるのを見て、びっくり仰天した。毎日毎日、役人や大勢の人々が集まってきて、技手に電信機を動かしてくれるよう熱心に頼み、伝言の発信と受信を飽くことなく注視していた」「日本人はいつでも異常な好奇心を示し、それを満足させるのに、合衆国からもたらされた珍しい織物、機械装置、精巧かつ新奇な発明品の数々は恰好の機会を与えた。」

ペリー提督遠征隊が報告している日本の工業化の見通しは、100年以上の時間を必要としたが、その通りとなった。

日本の職人の熟達の技は世界のどこの職人にも劣らず、人々の発明能力をもっと自由にのばせば、最も成功している工業国民にもいつまでも後れをとることはないだろう。人々を他国民との交流から孤立させている政府の排外政策が緩和すれば、他の国民の物質的進歩の成果を学ぼうとする好奇心、それを自らの用途に適用する心構えによって、日本人は間もなく最も恵まれた国々の水準に達するだろう。ひとたび文明世界の過去および現代の知識を習得したならば、日本人は将来の機械技術上の成功をめざす競争において、強力な相手となるだろう。

この遠征隊の中に一人の日本人がいた。遠征隊の仲間からはサム・パッチと呼ばれていたが、日本名は仙太郎、栄力丸に乗り組み紀州沖で遭難した漂流民である。サム・パッチは日本の役人に会い帰国するよう説得されたが、結局、日本に帰ることを希望せず、信仰の厚いゴープルという海兵隊員と一緒にアメリカへ戻った（『同遠征記』）。その後のサム・パッチは、グリフィスの日記の72（明治5）年1月31日の記事中に登場する。「カステラ、菓子、鶏、卵などはたくさんあって持って行けないので、サム・パッチに残して行く。ペリー提督が1853年、日本へ浮浪児として連れて帰ったあの正真正銘のサム。彼は今、クラーク氏の料理人を勤めている」。サム・パッチについて、その日の原注には、「本名はセンタロー。伊予の

生まれ。……サミーの遺体は東京に近い王子の寺の墓地にいま眠っている。……」(『明治日本体験記』)とある。クラークはグリフィスの級友で当時、静岡で教師をしていた。

仙太郎の仲間の、他の船員には、ジョセフ彦、岩吉らがいた。後に岩吉は伝吉という名で英国駐広東領事のオールコックに雇われて、59(安政6)年、通訳として日本に戻ってくるが、翌年1月、外国人殺傷事件が相次ぐなか、公使館の門前で刺殺されてしまう。彼は麻布光林寺に葬られた。

4 外国人の観察

(1) コミュニケーション

日欧間の通信事情はどうであったのか。1866(慶応2)年に来日したフランス海軍の一士官であるエドゥアルド・スエンソンは次のように記している。「セイロンの小港プワント・ド・ガル(Pointe de Galle)は電信でヨーロッパと結ばれていた。……郵便船が、電報を受け取ってシンガポールへ。電報はそこで『海峡タイムズ』という名のもとに印刷されて、その形で……日本沿岸の港へも届けられる。このようにして汽船航路の終点である横浜で受け取られる最新情報は、いつも30日程度遅れていた。それでも、手紙や新聞によって得るニュースよりも、14日早いことになる」(『江戸幕末滞在記』)。より速い情報入手法が、聖ペテルブルグとキャプタ間の回線利用だと紹介するが、一般の通信用でなく高価であり利用されていない、として、第三の道についてのべている。「1867年1月1日より、……北米汽船会社がサンフランシスコー横浜間に航路を開いたのである。第一船は航程を20日でこなし、20日しか経っていない英国からの情報を届けてきた」。

欧米各国の人々と話をするときに共通の言葉はオランダ語だったので、通訳は二人が必要になる。日本語・オランダ語の通訳とオランダ語・英語の通訳である。英語だけの場合に比べ時間はほぼ倍かかることになる。英

国公使のオールコックは、これについて『大君の都』で、次のように述べている。「決断を要する重要な取引のために数時間にわたってこのような公式会見を行うときの退屈さと徒労とは、筆舌につくしがたいものがある。というわけは、なにからなにまで二重に翻訳する必要があるからだ。まずオランダ語に訳し、それを日本語に訳しなおし、それをもういちど逆もどりさせる」(彼は59年11月、初代駐日公使となる)。また彼は、「最初の言葉の真意なり精神なりがはたして日本人につうじたか、それとも語られざる誤差が残っているかどうかということが、全然わからない」、と不安も述べて、「これを改善する唯一の良薬は、時間だけである。有能な外国人がみずから通訳となって日本語を話すようになるまではだめだ」という。時間が解決するのは確かであるし、彼の不安については、常に通訳、翻訳には付きまとう不安であるが、少なくとも、通訳が一回分減れば、それだけ間違いも減るとはいえるだろう。彼は、「数年もすれば、オランダ語はまったく廃止されて、英語にとって代わられるであろう」と書いている。

実際、オランダ語の通訳を巡っては、様々な問題があったようである。何度かそうした記述が彼らの日記に現れる。まず日本人通訳の話すオランダ語が古いという指摘。米国駐日総領事として56(安政3)年9月、下田に領事館を開いたハリスは、「日本人のオランダ語の知識は不正確である。彼らの知っているオランダ語は貿易業者や水夫の話すような言葉であり、そのオランダ語は250年前のものであるばかりでなく、主題も上記の範囲に限られている。それであるから、抽象的な観念を彼らに理解させることは甚だ困難である。まして形容的に彼らに話すことは、ほとんど不可能だ」(『日本滞在記』)と、57年4月29日の記事に書いている。6月17日には同趣旨のことを述べた後、「当座の役に立つような新語を少しも教えられていないので、条約や協約などに用いられるあらゆる言葉を全く知らない。……その上に彼らは、オランダ語の訳文の言葉を日本語そのままの順序でならべることを欲するのだ!!」と記している。この日、下田協約

が結ばれていて、この協約に使用する用語の翻訳をめぐって、かなり苦勞したことが想像される。

また、ハリスは日本人に経済学の初歩を教えるにあたっての苦勞を話している。「未だ新しくて、適当な言葉すらないような事柄について彼らに概念をあたえるだけでなく、それを聞いた通訳がそのオランダ語を知っていない始末なのだから。これがため、極めて簡単な概念を知らせるだけでも、往々にして数時間を要することがある」(57年12月27日)。このころ、ハリスが日本側に手渡した通商条約の草案について、彼は、その訳文が正確か否かをたしかめるため、次のような面倒な手順を踏んでいる。「日本の翻訳者をして日本語の訳文をよませ、且つオランダ語に口約させてヒュースケン君にきかせ、ヒュースケン君が(英文から)オランダ語に訳したものを持ちながら、それと対照した。それは莫大な骨折りであった」(58年1月23日)。

オールコックも日本の通訳の話すオランダ語の古さにふれている。彼が赴任したころ、「それまでの江戸の通訳は、オランダ語しか話さなかった——しかも、そのオランダ語は2世紀前のものであったから、ヨーロッパからやってきたばかりの人びとは、古くさい旧式の表現がつかわれるので、ひどく閉口させられたものである」(『大君の都』)と、嘆いている。さらに彼は、日本人は記憶力をたよりにして純粹のオランダ語を維持しているだけで、言語の進歩を無視し近代的な語法をにせもの扱いしている、と批判したうえで、外国「使節側の通訳であるオランダで育った一紳士〔ヒュースケンか〕と日本側の通訳たちとが、この問題にかんして論争するとは、驚きである。しかも、日本側の通訳が使節側の通訳のオランダ語は文法的にでたらめだと非難しているとは、おそれいる」(『同』)と、あきれる始末である。

英米との接触が増え、横浜などに居留する英米人が増えていくと、オランダ語を介しての意思疎通は、次第に英語によるものにとって代わられていくのは自然の流れだ。福沢諭吉が江戸に出た翌年の59(安政6)年に経

験したことが、それをよく物語っている。ある日、彼は横浜を訪ねるが、オランダ語が通じないことを知る。そこで、「これからは一切万事英語と覚悟を極めて」、江戸で英語を知っているという噂の森山多吉郎を訪ね、英語を習うことにする。ところが、彼が忙しすぎて教える時間が取れないうえに、「森山という先生も、何も英語を大層知っている人ではない。ようやく少し発音を心得ているというくらい」と見切りをつけて、何も習わないまま彼を訪ねることを止めて、藩所調所に入門することになる（『福翁自伝』）。

日本人通訳である森山多吉郎について、オールコックは来日した当時（59年）、「かれは、特筆するにあたいする。彼は通訳の主任であるが、その官職名が示しているよりもはるかに重要な人物だ」（『大君の都』）、と高く評価する。54年にペリー提督と結んだ条約から60年にプロシアと結んだ条約まで、「すべての条約の日本語の訳文作成という仕事を担当したのが」森山だからだ、という。森山がそもそも英語を習ったのが、米船の遭難者で日本に拘留されていた船員だったという話がペリーの遠征記に紹介されている。彼の英語の実力は、「その当時の森山は、英語はすこししか話さなかったが、その後に使節団〔2都2港延期のための遣欧使節〕とともにイギリスへも行き……ひじょうに語学が進歩していた」。この遣欧使節が出かけるのが61（文久元）年、森山も英語の通訳ができるようになる。次第に世の中は英語に切り替わっていく。

それからの英語の浸透ぶりは、少し時代が下がるが、大森貝塚の発見で知られるエドワード・モースの見聞に現れる。最初に来日した77（明治10）年7月、彼の部屋の近くの部屋で学生4人が語学の勉強をしていて、「彼らの部屋からは、日本語、独逸語、英語がこんがらがって聞こえ、時々仏蘭西語で何かいい、間違えるといい気持ちそうな笑い声を立てる。彼等の英語は実にしっかりしていて、私には全部判る」（『日本その日その日』）。その年の10月28日、モースの送別の宴が開かれたときの様子を次のようにいっている。「彼等は大学の、若い、聡明な先生達で、みな自由

に英語を話し、米国及び英国の大学の卒業生も何人かいる。彼等の間に唯一の外国人としていることは、誠に気持ちがよかった」(『同』)。この時代、日本人は英語が上手であった。

オールコックの期待したように、英国人にもアーネスト・サトウのような日本語を上手に話す外交官が現れる。サトウは43年6月にロンドンで生まれた。62(文久2)年9月に通訳生として横浜に到着、68(明治2)年、日本語書記官に昇進、82(明治15)年、三度目の賜暇で帰国するまで20年間にわたって日本に滞在した。そして95(明治28)年に今度は公使として日本に戻り、以後5年半、滞在した。幕末から明治初めにかけて外交官として存分に活躍しただけでなく、外交官の枠を超えて明治維新の動きをリードした人ともいえる。また、同じ外交官であり、サトウの後任の日本語書記官になるウィリアム・アストンや日本研究家のバジル・チェンバレンらとならぶ英国を代表する日本研究家でもあった。

サトウは日本語を話し、読み書きができた。彼は日本語の勉強法を回想録『一外交官の見た明治維新』に書いている。オールコックは日本語の習得には、はじめに漢字を覚えることが必要だとして、日本で働こうとする外交官は、まず北京に駐在して漢文の勉強をしてから江戸に来るのが、日本語習得の早道だという考えであった。実際サトウも北京で中国語の研修をしてから日本駐在となったが、サトウ自身は中国語の勉強が早道になるとは思わなかった。サトウは、彼の方法は「ラテン語の知識がイタリア語やスペイン語を学ぼうとする者にとって不可欠のものではないのと同様だ」、と述べている。日本に来ると彼は、アメリカの宣教師S・R・ブラウン師に日本語入門の授業を受ける。教科書は同氏の著『会話体日本語』で、その中の文章を彼らが復唱するのを聞いて、文法の説明をするというものであった。「また『鳩翁道話』という訓話集の初めの部分を一緒に読んでくれたので、私にもいくらか文語の構成が分かりかけてきた」。日本人の教師高岡要(紀州和歌山出身の医師)には、サトウの同僚が病気で帰国したので、一対一で教えることができた。「高岡は、書簡文を教

え出した。かれは、草書で短い手紙を書き、これを楷書に書き直して、その意味を私に説明した」。サトウはその英訳文を作ると、数日間そのままにして、その間日本語のあちこちを読む練習をした。それから、自分の英訳文を取り出して日本語に訳し戻す。こうした翻訳作業を続けることによって、彼は覚えた成句をつなぎ合わせて、書簡文を作れるようになった、というのが彼の日本語勉強法であった。

さらに彼は書道の教授も受ける。やはり同書によれば、「当時は御家流が流行していた。運悪く、私はこの商人用式の書体を始めてしまった」と言うほど日本語に通じていたが、次の御家流の先生を経て、維新後に3人目の唐様の高斎単山の教えを受けた。このひとは、「東京の能書家六人のうちの一人に数えられていた」。サトウはのちに彼から静山の号を与えられる。サトウ静山を日本風に書くと薩道静山となる（萩原延壽『遠い崖—アーネスト・サトウの日記抄』）。97（明治30）年のことになるが、サトウがヴィクトリア女王即位60周年式典でロンドンに戻ったときの晩餐会で、彼が日本語を話せることを知って驚いた女王が、日本語は非常に難しい言葉ではないのかという質問をすると、「ヨーロッパではその国の家庭に入って言葉を学ぶのが普通ですが日本では外国人が日本の家庭で生活しながら日本語を覚えることができないからです」（『アーネスト・サトウ公使日記』）、と彼は答えている。日本語が特別難しいわけではない、と言っているのは彼の語学の才ゆえなのだろうか。

当時の日常会話を紹介しよう。品物を並べた店先で店主は「みなたいへん安い all vely cheap」「たいへん上等 vely good」（なぜなら日本人の口からはrがほとんど聞こえない）というぐらいの英語は知っている（『大君の都』）。LとRの区別については、ベルツも同じことを言っている。「Lの音が日本語にないことは不思議に思われる。……何年間も英語を書いていた人でさえRのかわりにLを使い、またはその逆をする」（『日本その日その日』）と。買うときに外国人が覚えておかなければならない日本語は、「イコラ ナン モン（いくら、何文）」「タカイ、メッポウタ

カイ（高すぎる、あんまり高すぎる）」である（『同』）。スエンソンは次のようなやり取りを記録している。買い物のとき、最初のあいさつが「オヘイオー」（お早う）、店主は、だんだんに珍しいものを出してきて「イチバン！ イチバン！」と叫ぶ。客の「クラ？」（いくら）の質問で取引が始まる。帰ってくる答えは実際の価格の3倍である。そこで「アナタ！ マコト、マコト？」（本当の値段は？）、これを繰り返して歩み寄って、最初の値段の半分で手を打つ。店主は「ヨロシイ！ ヨロシイ！」と叫ぶ。スエンソンは、日本人は中国人にひけを取らないほど取引の才能を備えているという（『江戸幕末滞在記』）。商用のために作り出された言葉が、マレー語の駄目（ペケ peggi）と破毀（サランバン）に「アナタ」と「アリマス」を付け加えて、自分は複雑な取引をやる資格を持っていると、めいめいが思い込んでいた（『一外交官の明治維新』）。グリフィスは、来日早々、「少し待って」「いくら」「どこ」「よろしゅう」「早く」の五つの言葉を覚え、地図を持って東京の街に繰り出した（『明治日本体験記』）。

（2）消えた日本の美——天女のような女性

ラフカディオ・ハーンは1890（明治23）年4月に来日、『知られぬ日本の面影』をはじめとする数多くの作品を通して美しい日本を紹介してきた。彼の『神国日本』は、彼が東大を解雇された後、米国コーネル大学での講義用に準備した原稿をもとにして、1904年に出版された。そのなかで、日本女性について次のように述べている。「日本の作り出した最も不思議な審美的制作物は、……実はその女性だとよく言われるからである。……日本の婦人は倫理的には日本の男子とはちがった存在なのである。……この種の型の婦人は、今後十万年間はこの世に二度と再び出現しないだろう……この種の型は、近代風に作られた社会では作り出せるはずもない。……祖先崇拜の上に建てられている社会だけが、これを作り得たのである。」「日本婦人は……その細かな感受性、その無上な素直さ、その小児のように信心深くて信頼性を持ち、その周囲を楽しくするためにはいろいろ

ろと実に見事に、こと細かに手段方法鑑別の才をもっている」と。このようにも言っている。「日本の婦人は少なくとも仏教での天女の理想を実現している。他人のためにのみ働き、他人のためにのみ考え、他人を喜ばせることにのみ幸福感を覚えるような人間……こうしたのが日本女性の特質なのであった」。

はじめ日本の女性を「美しいと思わな」かったベルツは、ある日、宴席で有名な洗い女の踊りを演じる少女をみると、「優しくて美しく、上品な面立ちで、特にその中の一人は断然あでやかだった。……ただもううっとりするばかりだった。自分はこの小娘に、ほとんど首ったけにならんばかりだった。どうしても女の名前を聞きださねばならん」(『ベルツの日記』1880年3月19日)、というまでに惚れてしまう。同じ日の記事の後半部では、「これらの娘たちが若い頃から、日本式よりむしろ今少しわれわれの、いわゆるよい音楽と美しい動作を学んだとしたら、ほとんど無比の存在となることだろう」、とべたほめしている。

日本女性の美しさを見いだした二人は、当然のこのように日本女性と結婚する。ハーンは、90(明治23)年末、小泉セツ(節子)と結婚、95年に日本に帰化して小泉八雲を名乗る。1904年、54歳で亡くなる。三男一女を儲けた。ベルツはいつハナと結婚したのかはっきりしないが、彼の日記の1889年5月23日の記事に「父になった!……妻(ハナ)は男の子を授けてくれた。今のところ、父という感じが全然しない!」とあるので、この1、2年前のことと思われる。その後、長女が誕生するが3歳で病死するという悲しい出来事に見舞われる。1900年、長男はドイツに渡り、教育を受け始める。05年にベルツはハナとともにドイツに帰国した。

日本女性と結婚したもう一人の外国人、英国人フランシス・ブリンクリーにふれておきたい。以下、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書第13巻』から摘記する。彼は1867年、日本公使館武官補及び守備隊長として日本に赴任した。日本に愛着を感じたブリンクリーは、日本語の研究を始めた。彼の進歩は著しく、在留外国人中その比をみぬほどに正

確流暢に常用日本語を話し得るようになった。日本語を習うのに「寄席」に行って落語家や講師の話の聞いたりしたそうである。さらに漢字の読み書きもできるほどに上達した。71年、海軍砲術学校の主任教師に招聘され海軍省御雇となった。78年には帝国工部大学校の数学科教員に任命された。この年、水戸藩士の娘田中安子と結婚する。当時イギリス本国の法律ではイギリス人と日本人との婚姻は認められていなかったのも、彼は英国法院に訴え、ついにこの訴訟に勝って日本人とイギリス人との正式の結婚に新例を作った。81年、プリנקリーは、ジャパン・メイル紙を譲り受けて、経営者兼主筆として健筆をふるった。彼の記者生活は亡くなるまでのほぼ30年間続いた。また二人の日本人と共編で出版した『和英大辞典』は名著の評判をとる。家庭は2男2女が生まれ、1912（大正元）年10月、71歳で永眠した。

プリנקリーにはまだ紹介したいところが多くあるが、ひとつだけ付け加えておく。グリフィスの日記によれば、福井に来るはずだった「第十イギリス連隊のプリנקリー中尉は帝国政府によって東京に引き留められた」（1871年9月30日、『明治日本体験記』）。上述の海軍省御雇になったときである。その日の続きに、「福井にとって損失であったことが互いに相手の国の言葉を学びたい日本人と英語を話す人びとにとって大きな利益となった」といって、プリנקリーの書いた『語学独案内』を、「1875年に印書局で印刷された語学の自習書で、外国人により日本語で書かれた最初の独創的な仕事であると私は信じる。それは学問の生んだ傑作である」と絶賛している。

プリנקリーの赴任当時は、まさにサトウの活躍していた時期と重なるわけであるが、なぜかサトウの日記や回想録にプリנקリーの名はほとんど出てこない。しかし『遠い崖』によれば、サトウが出した『英和口語辞典』の序文の謝辞であげている個人名は、アストンとプリנקリーだけだそうである。付き合いがなかったわけではないだろう。『ベルギー公使夫人の明治日記』には、「サー・アーネスト・サトウ、プリנקリー大尉が

夕食に來た。……大変楽しかった」(1896年4月1日)とある。

サトウは武田兼という女性と71年頃に家庭を構え、二人の男子に恵まれたが、なぜか正式な結婚はしなかった。外交官だから赴任先の女性との結婚は、何か法的な問題があったからなのか、プリンクリーの勝訴の後であれば問題もなかったと思われるが、よくわからない。サトウの同僚、医官のウィリアム・ウィリスが長兄の夫人ファニーに宛てた手紙には、「当地で結婚するのは、公務についている者にとって、賢明でないように思います。すくなくとも、まだ下級の身分の者にとっては、そうです」(64年3月1日付)、と書き送っている(『遠い崖』)。1900(明治33)年、サトウは北京公使に転出する。家族と別れるにあたって、彼の日記(『アーネスト・サトウ公使日記』)には「源兵衛村で親子三人と最後の夕食をした。私が戻れない可能性については何も言わなかった」(4月21日)、「富士見町に別れを告げにいく」(5月3日)と書き、翌4日に出帆した。源兵衛村とは大久保にあるサトウの別墅、富士見町とは家族のために残した住まいのことである。北京での勤めを終え帰国する途中の06年5月、東京に立ち寄り、22日に家族と再会する。そして別れのとき、「富士見町へ行って、来年の9月までの分として小切手数枚を渡す」(5月26日)、「富士見町へ朝早く別れを告げにいく」(5月28日)、と立て続けに記され、今度こそ最後と思ったのだろうか、別れがたく思う彼の気持ちが察せられる。サトウは家族に生活費として小切手を終生、送り続けたそうである(『遠い崖』)。

ウィリアム・ウィリスも日本女性の江夏八重と結婚し一男を儲けているが、兄嫁のファニー宛ての手紙には日本の女性のことは一切登場しない(『同』)。1895(明治28)年、サトウが公使として日本に戻ってきたとき、前年に亡くなったウィリスに、渡すように頼まれた正確な遺産の金額を八重に伝えている(96年1月15日、『同公使日記』)。ウィリスにはもう一人遺産を渡す女性がいた。「吉田千野の消息を訪ねることにする」(同年6月29日、『同』)とある、千野がそうである。また、サトウの同僚の外交官アルジャーノン・ミットフォードには、トミという女性との間に於密

(おみつ)と名付けられた娘がいたとみられ、73年彼がアメリカ旅行中にサンフランシスコから日本を訪ね、同じ道を引き返してアメリカに戻ったことは、おみつに関わることとみられている(『遠い崖』)。

プッチーニ作曲のオペラ『蝶々夫人』は、日本女性の蝶々さんとアメリカの軍人ピンカートンとの悲恋物語として人気のあるオペラだ。この原作はアメリカ人のジョン・ロングの書いた『マダム バタフライ』。彼の姉が宣教師の妻で、長崎で布教活動をしているときに耳にした話を姉から聞いて、彼は小説に仕立てたという。本当にあった話かどうかかわからないが、長崎を舞台に似たような恋物語が、多く繰り広げられたのであろう。長崎でフォン・シーボルトは楠本たきと結婚するが、正式の結婚ではない。「アジアではオランダ女性を得られないので、現地人女性との結婚が奨励されたが、妻子を伴って帰国することは会社の規則で禁止されていた。そこで多くの者は内縁関係という便利本位な方式を選び……自国へ帰ってから、生涯を共にしようと望む理想の妻を選ぶことができたのだ」(『シーボルトの日本報告』解説)。この頃、彼は母に宛てた手紙(1823年11月15日付)に、「ここに古きオランダの習慣に従って、一時的ではありますが、一六歳の日本娘と契りを結んでおります」(『同』)、と書いている。二人の間には娘が一人生まれ、伊祢(イネ)と名付けられた。

55(安政2)年に日蘭和親条約が結ばれたことでフォン・シーボルトの罪が許され、59年、彼は30年ぶりに長男のアレキサンダーを連れて日本を訪れる。フォン・シーボルトは63歳になっていた。この当時、長崎の鳴滝に住むフォン・シーボルトをイギリス人の植物学者ロバート・フォーチュンが訪ねている。彼は、親切に迎えられ、彼の羨む住まいの周りにある植物園で、「シーボルト博士の大作『日本植物誌』の中に描写された、植物図の大部分の実物を見た」「シーボルト博士は日本語を自国語のように話し、周囲の人々に人気があり、また大きな感化を及ぼした。私は辞去する時、『博士！あなたは長崎の人々の間で、まるで君主のようですね』と言うと、彼は微笑をたたえて、『私は日本人が好きだ。そしてお互

いに尊敬している』と答えた……」そうだ（『幕末日本探訪記』）。その後、フォン・シーボルトは、61年に幕府の外交顧問に雇われるが、すぐに解雇され、江戸を退去することになる。アレキサンダーは、オールコックの願いでイギリス公使館の日本語通訳官に年俸300ポンドで雇われる。このとき鳴滝の住まいは「私の娘おイネさんの名義にして鳴滝にある居宅や山林、畑地を購入した」（62年4月7日、『シーボルト日記』）。日本にある資産をこのように始末すると、彼は翌月、長崎から帰国の途に就いた。

サトウは娘のイネと長崎で会っている。同僚のアレキサンダーの姉にあたるわけである。「彼女は四十歳になる美しい顔立ちの女性であるが、ヨーロッパ人の面影はどこにも見られなかった。……」（『遠い崖』）、と日記に感想を記している。66年12月のことである。

（3）消えた日本の美——郊外の美しさと大仏

日本から消えた美しさに江戸近郊の風景がある。ただコンクリートの塊がならぶだけの現代の街並みからは、昔の様子をしのぶようすがもないが、オールコックは江戸郊外の美しさをこう述べる。「郊外に出るとすぐに、美しいないしさっぱりした風景を目にすることができる。この風景と太刀打ちできるのは、イングランド地方の生垣の灌木の列の美しさぐらいなものであろう」（『大君の都』）。フォーチュンは、江戸近傍の田園風景を「どこにもある小屋や農家は、きちんと小ざっぱりした様子で、そのような風景は、東洋の他の国ではどこにも見当たらなかった」、と『幕末日本探訪記』に書いている。何人かは江戸近郊を游渉した思い出を語っている。

サトウは、「毎日江戸の近郊を馬で乗りまわし、ローレンス・オリファントの本にきわめて輝かしい色彩で描かれている王子のきれいなお茶屋や、甲州街道の十二社の池、そのほか丸子への途中にある洗足の池、あるいは目黒のお不動さまへ出かけた」（『一外交官の明治維新』）という。12年ぶりに日本に公使として戻ると早速、「カークウッドと目黒に散歩に出かける」（1895年9月22日）、と日記に記している（『アーネスト・サトウ

公使日記』)。明治になって来日したグリフィスは、「私は次々と訪ね歩いた。王子（オリファントらがたびたび描写している）、目黒（その近くに『権八と小紫』という恋人同士の墓がある）、高輪（日本の忠義の発祥地で、四十七人の浪人と……主君の墓と像がある）、亀戸（神にまつられた殉教者、菅原道真の記念碑）、芝、上野、向島など住民や観光客によく知られ、それを見物すると、日本人にとって大事なものを全部見たいという欲望にますます駆られ」（『明治日本体験記』）た、と思いを述べている。

江戸近郊の目黒について、ミットフォードが“Tales of Old Japan”（『古い日本の物語』）に収められている The Loves of Gompachi and Komurasaki（『権八と小紫の恋』）の話で、以下のように美しく描写している。

江戸から2マイルほどだが、大都会での労苦と喧騒から遠く離れて目黒村がある。……目黒に近づくと、あたりの景色はますます田園風になって、美しさを増す。深い木々の陰に覆われた道は、イングランドにあるような立派に茂った生垣がならび、稲の育ったエメラルドグリーンに輝く水田がひろがる低地につづく。右にも左にも趣のある形をした丘が隆起している。丘の上はたくさんのスギやモミ、マツカサの格好をした木々が伸びている。そのまわりには柔らかな竹藪が生え、夏のかすかなそよ風にその葉を優雅にそよがせている。……この低地の東をみれば地平線が青い海と重なり、西は遠く山々が連なる。正面には、小ざっぱりした、ピロードのような茶色の草ぶき屋根の農家の前で、一団の元気な日焼けしたわんぱく坊主たちが、全くの裸で飛び回っている。……足元近くにきれいな川が流れ、何人かの農夫が野菜を洗っている。やがて肩に担いで、江戸の近郊の市で売るために運んでいく。はるか遠く、山々の輪郭が霞むことがないほど、澄んだ大気のなかで見る眺望もたいそう美しいが、もっと近くにあるこまごまとしたものが、強い日差しを真上から浴びたり、時には空を横切るふんわりとした雲が投げかける翳につつまれたりして、レリーフのようにくっきりと際立って見える。

……私たちが見るものすべてが、ほれほれするほど美しい。

安藤広重の「目黒夕陽か岡」(富士三十六景)をみても、この情景をいくらか思い浮かべることができよう。このあと、ミットフォードは目黒村の入り口近くにある古い神社にふれ、目黒不動堂(瀧泉寺)のいわれを詳しく述べた後、彼の筆は、白井権八と小紫の悲恋話と、二人の来世での幸せを願って建てられた、目黒不動堂のそばにある比翼塚に移る。『古い日本の物語』は、この話のほか赤穂浪士やおとぎ話、彼が実見したサムライの腹切りの話などを集め、海外の人に日本を紹介した本で、1871年に英国で出版された。当時のベストセラーであった。新渡戸稲造の『武士道』にも引用されており、ハーンやイザベラ・バードも読んでいた。ちなみに、蘭学の祖青木昆陽は目黒不動堂の裏手にある小高い丘の上の墓地に眠っている。

目黒村の入り口にある神社というのは大鳥大明神のことであるが、その神社と目黒不動堂の間に蟠龍寺という浄土宗の寺がある。1871(明治4)年末、そこに二人のフランス人が現れる。銀行家でコレクターのアンリ・チエルヌスキーと彼の友人の美術評論家テオドール・デュレである。彼らの目的は、寺内にある丈六の阿弥陀如来像の購入であった。『江戸名所図会』にある蟠龍寺窟辨天祠の図を見ると、本堂に向かって左手にその像が描かれていて、これが目黒大仏といわれていた。霊雲山蟠龍寺の項には、「境内に丈六の阿弥陀如来の銅像あり。また後ろの方山崖の下に岩窟ありて、うちに弁財天を安置す」とある。幕末から明治にかけて活躍した写真師下岡蓮杖がこの像を撮影していて(『下岡蓮杖と白井秀三郎の写真帖より』)、その写真にはローマ字とカナ文字で目黒大仏と書き込まれている。キャプションには「東京 目黒不動堂瀧泉寺の大仏」とあるが、間違いであろう。

デュレの著した“VOYAGE EN ASIE”(『アジア旅行記』)によれば、寺に着くと、すぐ持ち主と買取の交渉がはじまり、まとまると早速解体作業

に移り、翌日に、その作業は終わってすべてを寺から運び出した。次の日、大仏が運び出されたことを聞いた地元の人々が総出で、彼らの宿に来て買い戻しの要求をし、数日やり取りがあったが、その間に梱包して横浜から送り出してしまった、とある。彼は、この如来像の表情から絶対的な静寂、執着を捨てた諦念を感じ取ることができて、これを得たことにより彼らの仏像のコレクションは完璧なものとなった、と満足気に記している。サトウは目黒大仏を、「彫刻美術の中での仏像制作の分野における近代の傑作としてM・セルヌシが所蔵する十八世紀後半につくられた目黒大仏を挙げて置こう」(『明治旅行案内』)、と紹介している。デュレは、像の高さは4 m 28cm と記し、廃仏毀釈時の日本の海外流出美術品では最大のものと言われている。現在、大仏はパリのチェルヌスキー美術館に展示されていて、ここのホームページ (<http://www.cernuschi.paris.fr/>) でも写真を見ることができる。大仏の解説文に購入額は総計500両とある。明治4年5月に新貨条例が施行され通貨の呼称が両から円に変わり、旧1両=1円=1米ドルであった。

ついでに言えば、この旅行でチェルヌスキーが日本から連れ帰った狆を、作品名「タマ日本犬」として、マネとルノワールが描いている。現在、二つの絵は別々の美術館に所蔵されているが、それぞれの来歴から推すと、ルノワールはチェルヌスキーのために描き、マネはデュレのために描いたとみられる。マネの作品には「テオドル・デュレの肖像」もある。狆という犬種について、提督ペリーの遠征記には、日本の將軍からの贈物には必ず狆が含まれていると報告され、英国公使のオールコックはこのスパニエル犬種はスペイン原産で、17世紀にイギリスに持ち込まれる一方、南蛮貿易で日本にも持ち込まれたのであろう、といっている。

ところで、鎌倉の大仏も危うく海外に流出しかけたという。ベルツが1880(明治13)年11月8日の日記に、ひとりで江の島、鎌倉に行ったことを書いているなかで、次のように言っている。「……名高い大仏、すなわち青銅の仏の座像がある。美しく上品な顔立ち。十年前に日本政府は日

本の持つ最も立派なこの青銅像を、地金の値段で外人に売払うという、とんでもない考えを起こしたのであった！ それほどまでに、信心と国粹に対する理解が全く失われていたのである。幸い、取引の話はさたなしで済んだ。……」。

5 宗教と葬送

(1) 宗教

この時期に西洋から日本にやってくる人々にとって最大の関心事の一つは、日本人の信仰する宗教は何か、ということであった。仏教、儒教は理解できるが、それらの教えが伝来する以前からある神道とは何か。その存在は知ってはいるものの、よく分からなかった。

日本研究家チェンバレンによる神道の解説はこうである。「神道はしばしば宗教として言及されているが、……その名〔宗教〕に値する資格がほとんどない。神道には、まとまった教義もなければ、神聖なる本〔聖書・経典の類〕も、道徳規約（モラル・コード）もない」（『日本事物誌』）。

1874（明治7）年2月、日本アジア協会（72年7月設立、英米系の日本研究団体）で外交官サトウが「伊勢神宮」と題して発表した。その発表後の出席者からの発言をみれば、日本をよく知る西洋人たちの神道理解が、どのようなものであるかがよく分かるので、『遠い崖』から紹介する。ヘボン式ローマ字で知られる同協会会長のジェームス・ヘボンは、「わたしは神道とは何かを究明しようとして、ずいぶん努力してみたが、いくら努力しても報われることがないので、この努力をずっと以前に放棄してしまった。……」。サトウは、「神道には道徳律がないというヘップバーン（ヘボン）氏の意見に同感である。……」。英国公使のパークスは、「わたしも他の諸君と同じように、神道とは何かが理解できなくて、失望している。一般に日本人も、神道をどう説明したらよいのか、途方に暮れているように思われる。……」。米国の宣教師ブラウンは、「わたしの考えでは、

神道は言葉の正しい意味で宗教ではない。わたしはこの国に十四年以上も住んでいる。その間神道とは何かを知ろうと努力しなかったわけではないが、ヘップバーン（ヘボン）氏も述べているように、この国の文献を調べてみても、報われることはほとんどなかった。報われたことといえば、神道の中身がいかに空虚なものかを発見したことだけである」。彼ら欧米人の神道理解は、チェンバレンの解説と変わりはなく、神道は宗教でないというものであった。

ただサトウはこの後も神道の研究を続けている。この研究を進める上で彼の考え方が、論文「古神道の復活」（「伊勢神道」と併せて『アーネスト・サトウ神道論』に所収）に、次のように書かれている。「神道の本質とその起源についての結論は、歴史的に研究された通常の經典によって導かれるものでなくてはならない。」として、その効果的な方法は、『古事記』や『日本紀』、祝詞などの研究をすることであって、それらを正確に理解するためには、本居宣長が主張したように、「まずは『源氏物語』やその他の『物語』の言葉を丹念に読み解くことから始めなければならない。この作業は『万葉集』を理解するための鍵となる」。『万葉集』の正確な理解が、『古事記』、『日本紀』、祝詞などを正しく読み解くことにつながり、「正しい結論に到達することができる」と。彼は、その後、祝詞の研究についての論文を発表しているが、84（同17）年にシャム領事として転出してしまい彼の研究は中断してしまったようである。

「神道は宗教でない」という人々に対して、「いや、神道は日本の宗教である」と主張するのがハーンである。彼は「家庭の祭屋」（『神々の国の首都』）のなかで次のように述べている。「神道は宗教である——ただしそれは一般にいう宗教とは違って先祖代々伝わる道徳的衝動、倫理的本能にまで深められた宗教である。すなわち神道は『日本の魂』——この民族のすべての情動の源なのだ」。さらに、「神道の太初性格は……あらゆる祭祀のうちで最古のもの——ハーバート・スペンサーの言葉を借りれば『すべての祭祀の根源』——死者に対する畏敬の念である。……神とは御霊であ

るから、すべての死者は神になる」という。『神国日本』ではこのように述べる。「いまなお全国民からいろいろの形で信仰されている日本の宗教は、すべての文化を誘導する宗教の土台であり、またすべての文化的社会の土台となってきたあの祭祀——すなわち祖先崇拜の祀である」。神道は祖先崇拜であり、祖先崇拜は家族の先祖を祀るだけでなく、地域社会の祭祀、国の祭祀を含むものであって、神道は日本文化の根底にある、「日本の魂」であるという。したがって、「日本人を論じて彼らは宗教には無関心だと説くほど、馬鹿げた愚論はまずあるまい。宗教は昔そうであったように、今もなお相も変わらず、この国民の生命そのものなのである」ということになる。

しかし、日本人が宗教に無関心だとみる欧米人は結構多い。ハリスは日記に、「特別な宗教的参会を私はなにも見ない。僧侶や神官、寺院、神社、像などのひじょうに多い国でありながら、日本ぐらい宗教上の問題に大いに無関心な国にいたことはない、私は言わなければならない。この国の上層階級の者は、実際はみな無神論者であると私は信ずる。」(1857年5月27日)と書いている。スエンソンは次のように記している。「聖職者には表面的な敬意を示すものの、日本人の宗教心は非常に生ぬるい。開けた日本人に何を信じているのかたずねても、説明を得るのはまず不可能だった。」(『江戸幕末滞在記』)と。英国人の旅行作家で1878(明治11)年来日したイザベラ・バードは、『イザベラ・バードの日本紀行』で「日本人はわたしがこれまで出会ったなかで最も無宗教な人々である。日本人の巡礼はピクニックで、宗教的な祝祭はたんなる祭りである。」と言っている。

そんな日本人にキリスト教をどう広めようとするのか。そもそもキリスト教は、「政治的支配者の命令が主なる神に対する義務と相反するときには、……神にしたがわねばならぬ宗教」であり、東洋の諸国では「その性質からして反逆的なものなのである」、とオールコックは述べている(『大君の都』)。またキリスト教は、祖先崇拜を偶像崇拜につながるとして禁じている宗教でもある。バードはキリスト教の布教における障害を次のよう

にいう。「キリスト教を阻止するおもな障害は、わたしの判断が正しいとすれば、宗教的本能と宗教への渴望が全般的に絶えてしまっていること、国家信仰と日本人の祖先崇拜が結びついていること、最も影響力のある階層にまったく不信心な人々が多いこと、禁欲の福音にたじろいでいる不道徳性があまねくあること、イギリスから持ち込まれた不可知論がひろがっていることです」。最後に挙げられたイギリス哲学の影響については、浄土真宗の「英語を話すお坊さん」である赤松連城から、すでに教えられていた。彼女は布教にあたる宣教師の不勉強についても、「宣教師たちは日本人の二大信仰についてほとんどなにも知りません。異教徒のさまざまな重要な儀式の意味を尋ねると、『どうでもいいことに興味はありません』とか『そんなこと知らなくてもかまいませんよ』……という答えがよく返ってきます」(『同』)と述べている。二大信仰とは、神道と仏教のことである。

バードによれば、1878年時点で「一六一七人の日本人をプロテスタントへ改宗させ、一方ローマ・カトリックは二万人、ギリシャ正教は三〇〇〇人をそれぞれ改宗させたとしており」(『同』)、三四〇〇万人の日本人のほとんどが無神論者や物質主義者であるか、子供じみた迷信にのめりこんでいるという。彼女は、この信者の数を見て、布教における障害や宣教師の不勉強を知って、日本をキリスト教国化するのは難しいと思ったのかどうかはわからないが、「キリスト教を受け入れれば、高潔さと国民の立派さという真の道義を備えた日本は、最も高尚な意味において、『日出ずる国』となり、東アジアの光明となりうるかもしれないということである。」(『同』)と、書き残していることからすると、キリスト教の布教について楽観視していたのかもしれない。

(2) 葬 送

野蛮な国、非キリスト教国の日本で死ぬようなことがあれば、一体どうなるのか。タイモン・スクリーチの『阿蘭陀が通る』によれば、「以前商

館が平戸にあった頃には土葬が許されていた。平戸から一・五キロほどの沖合に浮かぶ横島がその地である。長崎ではヨーロッパ人の遺体を陸上で火葬することは許されていたが埋葬することは禁止されていた。しかし、ヨーロッパ人は火葬を認めておらずこれを受け入れられない。……ヨーロッパ人の遺体はただ海に投げ捨てられていたのである。」とある。土葬禁止を「野蛮で残忍な話」と悲しむオランダ人の抗議によって、17世紀半ばにようやく許可される。1654年、江戸参府中に亡くなったオランダ人の遺体は、棺を使いオランダの慣習に則って「浅草という名の寺」に埋葬された。翌年には、長崎で亡くなったオランダ人の船員は稲佐の梧真寺に葬られた。以後、「長崎で没したヨーロッパ人は、例外なく稲佐にある浄土宗の寺院、終南山梧真寺に埋葬された」ということである。

ペリー艦隊が2度目に日本に来た1854年3月、ミシシッピ号所属の一人の海兵隊員が死亡した。その遺体の埋葬について日米間でやり取りがあった。『ペリー艦隊日本遠征記』によると、日本側は、外国人を埋葬するための寺院を長崎に用意してあるのでそこへ日本船で運ぶ、と提案したが、米国側はそれを拒否し、自らの停泊地に近い夏島（現横須賀市）に埋葬することを主張したが、日本側はこれを認めず、横浜にある寺院の隣接地を申し出て、同意に至った。葬式は従軍牧師が司り、遺体が埋められた後、仏僧が仏教特有の葬式を始めたそうである。この後も下田で一人、箱館でも二人の水兵の葬式を行っている。この横浜の隣接地がのちの横浜外国人墓地となる。62年9月に起きた生麦事件の犠牲者のチャールス・リチャードソンもここに葬られた。米国公使ハリスの通訳兼書記として活躍したヘンリー・ヒューステンは、赤羽接遇所から麻布の公使館に戻る途中に暗殺された（61年1月）。キリスト教徒である彼は土葬されなければならないが、「当時御府内では土葬が禁止されていたため、江戸府外であった光林寺に葬られた」（東京都港区教育委員会資料）という。英国公使オールコックの通訳であった伝吉が眠る地のすぐ後ろに彼の墓所がある。

最後の審判の日、復活して裁きを受けると信じるキリスト教徒にとっ

て、火葬は「野蛮で残忍な」ことで土葬が当たり前だった。彼らが火葬場の見学を希望することは、どのような気持ちからだったのであろうか。バードは、78（明治11）年12月、日本滞在の最後の日々を、江の島、鎌倉への小旅行や買い物、送別のパーティーなどで忙しく過ごすなかで、ある「見どころ」(one "sight") という表現を使って目黒近くの桐ヶ谷火葬場の見学に出かけている。『イザベラ・バードの日本紀行』にその模様を次のように書いている。火葬場の外見について、「厳粛な用途にはささやかすぎるように見える建物」は、高い屋根と煙突を持ち、「田園的なまわりのようすとあいまって、『火葬場』というより『農家』を思わせます」と書き、さらに、なかには四つの部屋があって御影石の台が並び、目に入るものはこれで全てで、料金は1円（約3シリング8ペンス）、単独の火葬の場合は5円、と料金を記す。遺体の納められた棺は午後8時に火が点けられ、翌朝の6時に小さな灰の山となるが、煙突が高いので近所の住民に迷惑をかけることがないと、遺体が無害で完全に消滅することを書き添えている。

モースも82（同15）年10月に、日本美術品の収集家であるビゲロウとともに千住の火葬場を見に行っている。モースは、「陰気な小屋や建物のある、物淋しい場所をみるだろう」という事前の予想に反して、「掃き清めた地面、きちんとした垣根、どこでも見受ける数本の美しい樹等」、都会の公共の建物と変わらぬたたずまいを見た。レンガ造りの平屋の二棟は、その間にたつ煙突から左右に伸びた煙道でつながれている。分かりやすいように彼はそのスケッチを残している。棟の大きさは、長さが72呎（フィート）、幅が24呎で、それぞれ3つの部分に分かれている、という。「諸設備の簡単さと清潔さとは、大いに我々に興味を持たせた。」と書いた後、火葬の方法について詳しく記す。料金は最高が7円、その次が2円75銭（約1ドル37セント）、一番安いのが1円30銭である。最後に彼は、「我が国ではこの衛生的な方法を阻止する偏見が、いつまで続くことであろうかと考えたりした」という感想を書き残している（『日本その日

その日』)。

グリフィスは71(同4)年3月、福井に到着早々に火葬場の見学をしている。「火葬場には4つの炉がある。葬式の行列を見、真宗の僧侶による儀式を火葬場の堂でまのあたり見た」。モースと同じく、火葬の実際を詳しく綴り、一本が木、もう一本が竹の箸でものを食べないという迷信が分かったという。そして、骨壺をしまう墓の形や墓を掃除する人々の話を書いている(『明治日本体験記』)。彼は火葬そのものより、日本人の死にかかわる一連の儀式に関心があったようで、火葬について特に感想は述べていない。

日本における火葬に興味をみせたこの西洋人3人のほかに、日常的に火葬場を眺めていた西洋人が、ハーンである。彼は晩年、東京の市外(現新宿区)西大久保に住んでいた。散歩で自宅から落合の火葬場近くをよく歩いたそうである。妻小泉節子の思い出話によると、「落合橋を渡って新井の薬師の辺までよく一緒に散歩をしたことがあります。その度毎に落合の火葬場の煙突を見て今に自分もあの煙突から煙になって出ると申しました。」(『思い出の記』)。そのとき、「のぼりにし雲居ながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に」(『源氏物語』御法巻)の歌をハーンは思い浮かべていたのかどうか。ハーンは1904(明治37)年9月、急逝する。葬式は瘤寺でおこなわれて雑司ヶ谷墓地に埋葬された。

参考文献

- 井桜直美『下岡蓮杖と臼井秀三郎の写真帖より』JCI フォトサロン、2007年
市古夏生、鈴木健一校訂『江戸名所図会』3、ちくま学芸文庫、1996年
オールコック、ラザフォード『大君の都』上・中・下、山口光朔訳、岩波文庫、1962年
栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』平凡社東洋文庫、2009年
グリフィス、ウィリアム『明治日本体験記』山下英一訳、平凡社東洋文庫、1984年
ケンペル『江戸参府旅行日記』斉藤信訳、平凡社東洋文庫、1977年

小泉節子、小泉一雄『小泉八雲作品集』第十二巻、恒文社、1967年

小泉八雲『神々の国の首都』平川祐弘編、講談社学術文庫、1990年

サトウ、アーネスト『一外交官の見た明治維新』上・下、坂田精一訳、岩波文庫、1960年

サトウ、アーネスト『アーネスト・サトウ神道論』庄田元男訳、平凡社東洋文庫、2006年

サトウ、アーネスト『アーネスト・サトウ公使日記』Ⅰ・Ⅱ、長岡祥三訳、新人物往来社、1989年

サトウ、アーネスト『日本旅行日記』1、2、庄田元男訳、平凡社東洋文庫

サトウ、アーネスト『明治日本旅行案内』上・中・下、庄田元男訳、平凡社

白幡洋三郎『プラントハンター』講談社選書メチエ、1994年

シーボルト、フィリップ・フランツ『シーボルト日記』石山禎一訳、八坂書房、2005年

シーボルト、フィリップ・フランツ『江戸参府紀行』齊藤信訳、平凡社東洋文庫、1967年

昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第十三巻、同大学文化研究所、1959年

スエンソン、エドゥアルド『江戸幕末滞在記』長島要一訳、講談社学術文庫、2003年

スクリーチ、タイモン『阿蘭陀が通る』村山和裕訳、東京大学出版会、2011年

ダヌタン、エリアノーラ『ベルギー公使夫人の明治日記』長岡祥三訳、中央公論社、1992年

チェンバレン、バジル『日本事物誌』高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、1969年

萩原延壽『遠い崖——アーネスト・サトウ日記抄』全14巻、朝日新聞社、2007年

ハーン、ラフカディオ『神国日本』柏倉俊三訳注、平凡社東洋文庫、1976年

バード、イザベラ『イザベラ・バードの日本紀行』上・下、時岡敬子訳、講談社学術文庫、2008年

ハリス、タウンゼント『日本滞在記』上・中・下、坂田精一訳、岩波文庫、1953年

ヒュースケン、ヘンリー『ヒュースケン日本日記』青木枝朗訳、岩波文庫、1989年

平川祐弘『小泉八雲とカミガミの世界』文藝春秋、1988年

フォーチュン、ロバート『幕末日本探訪記』三宅馨訳、講談社学術文庫、1997年

ベルツ、トク編『ベルツの日記』上・下、菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979年

ボダルト＝ベイリー、ベアトリス『ケンペル』中直一訳、ミネルバ書房、2009年

- ホークス、フランシス『ペリー艦隊日本遠征記』上・下、オフィス宮崎訳、万来舎、2009年
- 松井洋子『ケンペルとシーボルト』山川出版社、2010年
- 松方冬子『オランダ風説書』中公新書、2010年
- マルケ、クリストフ「アンリ・チェルヌスキとテオドール・デュレが見た明治四年の日本」丹尾安典訳、『近代画説』第8巻所収、明治美術学会、1999年
- ミットフォード、アルジャーノン『英国外交官の見た幕末維新』長岡祥三訳、講談社学術文庫、1998年
- ミットフォード、アルジャーノン『ミットフォード日本日記』長岡祥三訳、講談社学術文庫、2001年
- メーチニコフ、レイ『回想の明治維新』渡辺雅司訳、岩波文庫、1987年
- 森銑三『おらんだ正月』小出昌洋編、岩波文庫、2003年
- モース、エドワード『日本その日その日』石川欣一訳、講談社学術文庫、2013年
- 吉村昭『ふぉん・しいほとんの娘』上・下、新潮文庫、1993年
- ローゼンストーン、ロバート『ハーン、モース、グリフィスの日本』杉田英明他訳、平凡社、1999年
- Benfey, C., *The Great Wave*, Random House Trade Paperback Edition, 2003
- Cortazzi, H., ed., *Mitford's Japan Memories & Recollections 1866-1906*, Japan Library, 2002
- Duret, T., *Voyage en Asie: le Japon, la Chine, la Mongolie, Java, Ceylan, l'Inde...* (Ed. 1874), Hachette Livre
- Mitford, A. B., *Tales of Old Japan*, Dover Publications, Inc. 2005

